

ふたり 2人の子どもを見比べてみよう！ <4F>



岸田劉生 《麗子像》 1922年
テンペラ・カンヴァス



関根正二 《子供》 1919年
油彩・カンヴァス

Q1. どんな表情？

にっこり しょんぼり ドキドキ にやり ねむい _____

Q2. 何をしているところ？

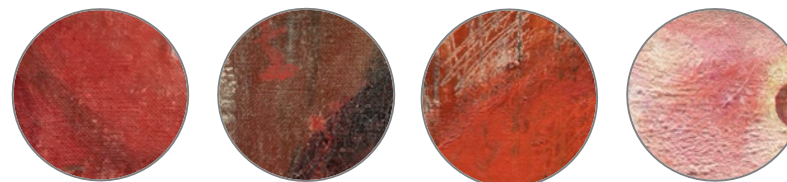
だれかが来るのを待っている だれかとおしゃべりしている ねがいごとをお祈りしている なんだか困っている _____

Q3. どんなところにいる？

あったかい部屋 涼しい部屋 ヒミツの部屋 土の中 水の中 _____

Q4. 手はどんな形をしている？ポーズを真似してみよう！

Q5. 絵の中にはたくさんの赤色があるね。右の赤色はどこにあるのが探してみよう！





大正時代から昭和時代にかけて活躍した洋画家です。洋画とは、フランスやイタリアなど西洋絵画の技法を用いて、日本で描かれた絵画のことです。岸田はポール・セザンヌ（1839-1906）やフィンセント・ファン・ゴッホ（1853-1890）などの影響を受けながらも、日本画や東洋画など幅広いジャンルを融合させました。岸田の絵画には、やわらかなタッチと暖かな色使いによってまとめられた、西洋と東洋が混ざり合っています。絵画への探究心は尽きることなく、娘の麗子をモデルにした作品をなんと 100 点以上も制作しました。《麗子像》もそのうちの 1 点ですが、この作品は「テンペラ」が使われている珍しいものです。テンペラとは、粉末状の顔料と卵白などの液体を練り合わせた絵の具を用いた技法のことで、水分を含んだ絵の具が透明感のある層をつくり、つやつやとした光沢が生まれます。



大正時代に活躍した洋画家です。関根もまた、西洋絵画からの影響を受けていますが、想像力によって頭のなかにある世界を広げ、鮮やかな色使いと硬く鋭いタッチによって、幻想的な絵画をつくり上げました。わずか 20 才で亡くなる直前に描かれた《子供》は、末の弟・武夫、または近所の子どもをモデルに描いたと考えられています。

岸田劉生と関根正二

2人が画家として活躍していた時代、日本の洋画界には「文展」と「二科会」という2つの派閥がありました。文展とは、1907年に創設された文部省による美術展覧会のことです。この威厳ある文展から脱退し、新しい風を吹かせようとした人々によって1914年に創設されたのが二科会です。岸田は、文展の中心人物である黒田清輝の下で絵画を学び、1910年に第4回文展で入賞を果たしました。一方、関根は印刷会社で働きながらほぼ独学で絵画を学び、1915年に第2回二科会に入選を果たしました。このように、画家としては正反対のスタートを切った2人でしたが、その後、岸田は文展を離れ、さまざまな画家グループとの関わりをもつなかで、1917年から二科会に参加するようになります。《麗子像》と《子供》を見比べてみましょう。そこにはちがいでなく、共通点も見つけることができます。2つの作品には、同じ時代を生きた画家たちによる、それぞれの目線からみた子どもたちが描かれています。

色とりどりの赤！

2つの作品の赤色を見比べてみましょう。どちらの人物も赤い服を着ていますが、その印象はちがって見えます。《麗子像》の着物は、華やかでおめでたい赤が使われています。背景には黒っぽくどんよりとした赤、頬や唇にはキュートな赤。よく見ると、輪郭や髪の毛、指先にまで赤色が使われています。このように少しずつ違う赤色をまんべんなく置くことで、全体がバランス良くまとまっています。一方、《子供》の服には、ハツとするような鮮やかな赤が使われています。輪郭や髪の毛に加えて、少年の顔にもたくさんの赤が使われています。中でも、瞳に使われている錆びのような赤は、少年の老成した表情を作り出しています。背景に透明感のある青色が使われることによって、人物の生き生きとした赤色がより引き立って見えます。

じっとしてられる？

人物の表情を見比べてみましょう。まだ小さな子どもにとって、長時間じっとしているのは退屈かもしれません。しかし、この時すでに30回以上も父のためにポーズを取っていた麗子は、リラックスした表情を浮かべています。《麗子像》は上品にニコリしているようにも、不気味にニヤリしているようにも見えますね。一方、《子供》のきゅっと結ばれた唇と見開いたような両目は、緊張しているように見えます。モデル歴の差は、それぞれのポーズにも表れています。

麗子は片手を宙に浮かせているのに対して、少年は両手を膝の上に乗せています。どちらのポーズが長時間じっとしてられるかは、実際に真似してみたらよく分かるでしょう。

